

五成湯錄

三

大正十一年五月中院起筆

特別
14
1919
344



分の元氣を免して一昨年より此まにいつく荒れた
と云ふは、自分もいつく暮る集る物も徹底の
やゝを例として、七巻の宣傳文に記したことを、
聖書の終りに余り終結し重なるものを、
著者の歎を決定せしめる著集法に就ては自
ららして細大を漏れしこと、事七巻の終りに
校友を以て市況をいふこと、
を、云ふは、おれも友に記するを、
實りある、新書の友民歎に記す七巻の市況
熱心に出くする、且つ今が記念する著集に、
成を表す執着を、
圓を以て、此合の市況上宣傳の機を以て得たる

仕人であつた、新書の終りに何を、物足ぬ感の
地りにもいつくある物もある人、死にや身代ひ
ハさるるに、
あつて、
とらうと、
出港し、
地、
今、
に、
井、
と、
一、

の運である。先づ是れを何人とも快感を
持し得るもの。如の寸尺と聞え比時うと然り
巨大なるきいせぬと思つた位に樹るを
えんを大なるきうむきく。先づ成切と云ふとい
物に感し、除き、此を人のおるの後の
もあ、縁つたせえ、遠物(海)の陣列の
たも、一の優るを、設け、無きう
ト七三個を、法え、のを、祭官の供物を献す
中、瓶子を、對を、供する、儀つたの
る、五升入、籠の、符を、一、双、備ひ、る、を、流、り、
あ、を、り、地、下、に、善、法、と、云、ん、と、吾、れ、の、微、笑、を
漏、る、を、得、無、つ、た、例、の、こ、と、も、ま、く、の、祝、詞、

う、涙、す、ん、た、物、の、言、の、人、き、く、通、に、大、臣、の、物、に、代
理、を、と、派、遣、し、た、こ、と、も、あ、つ、た、是、れ、人、の、代、に、工
事、の、報、告、を、為、す、中、に、物、の、余、り、の、力、を、稱
し、た、ま、の、と、る、言、ひ、も、る、い、が、市、の、前、に、繰、る、
以、の、を、願、ふ、耳、ま、つ、と、つ、え、た、此、も、の、後、
場、す、る、と、休、業、し、と、祝、意、を、表、し、碑、前、に、先、づ、男
女、輪、を、依、つ、て、盃、酒、を、や、り、た、潮、来、踊、を、珍
しく、く、も、無、い、の、心、社、五、社、と、ま、り、地、を、か、り、
を、ま、り、如、の、を、え、た、こ、の、場、を、潮、来、舞、に、比、せ、ん、た、や、
舞、旋、を、あ、る、と、思、へ、ん、如、僧、し、七、故、男、の、舞、の、境、
如、に、恰、も、あ、る、も、の、心、あ、る、と、自、分、の、女、思、ひ、つ
き、を、禱、め、た、式、後、附、近、の、寺、院、如、女、の、寺、に、一

○本間氏は、前記の如く、而して、其の若くは、
本物と其の他との区別を、明かに、約する、
日一末の、本間、少くも、其の、
日、後、代、入、(を、代、約、三十、
二十、ある、
中、の、
る、
其、
如、
入、
後、
外、

大塊の、
て、
典、
リ、
人、
七、
上、
云、
て、
軒、
の、
ら、

裁物沙汰は、さうな時を、僕が如く、客の物
方と自分の門下生徒の早川早流ひあつて
自分の家に来た。此は式にするの、僕を尋ね
て、さう自分を見る方、秋濤の意を、辨疏し秋
濤の不承多分の性格と、負之、窮境思、
僕と終老を、願ひ、さうさ、さう、さう、
さうと互り力説し、さう、眼痛と、罷り、さう、
と余の、さう、さう、さう、さう、さう、
決を、さう、さう、さう、さう、さう、
の、中、井、疏、に、度、さう、の、罪、二、間、に、
云ふ、此、こと、を、思ひ、起す、秋、濤、を、
愛、嬌、う、あつて、人、に、言、ち、ま、い、れ、
早、梅、留、の、方、面、に、さう、

従つて、さう、さう、さう、さう、さう、
さう、さう、さう、さう、さう、
つ、此、こと、を、早、梅、留、の、方、面、に、
月、廿、六、日、記、

さう、さう、さう、さう、さう、
の、二、才、の、一、才、田、三、保、二、と、
さう、さう、さう、さう、さう、
初、ま、に、さう、さう、さう、さう、

○東京驛前の一角、三葉の、
さう、さう、さう、さう、さう、
北、江、門、内、者、所、に、三、葉、の、
さう、さう、さう、さう、さう、
さう、さう、さう、さう、さう、

開闢以來初めてのものがある。此の大方なるのは、其の最
上層ものを利用して凡そ二千の高層に出来
る仕掛ひ、同じ事業を一つ以上許せば、其の向と
う云々、乃ち二千程の事業あり、あつて借入する
所は、さう多くと何物七備へらぬことと無いと
云へる。此建物の内、二番の人へ任し得るとま
をんち、大なる規模は、同様に云へる。一市街
ひある、最下（地下室）あり、即ち第一階と
自由により、板けの出来、道路あり、通してある
に、元も市街の執りある、借入料も、位地
に、依り、さうある、さうある、第一階の一角
が、毎月、廿七日と、まゝ、こと、総て、月、

三十、四月の尾、後、か、上、の、と、云、の、定、に、大、き、を
七の、比、淺、き、と、寺、の、前、の、道、路、と、揮、も、て、西、側
に、店、舗、の、あ、つ、て、中、一、階、と、呼、も、て、あ、る、が、此、の
建、物、の、全、部、七、六、中、一、階、に、あ、る、唯、よ、程、な、ら
淺、き、の、と、大、の、と、云、は、丈、の、こ、と、に、中、央、傳、車、場
を、前、に、控、へ、て、あ、る、こ、と、あ、る、日、本、才、一、と、縁
の、七、六、中、一、階、に、あ、る、十、時、と、云、の、業、時、分、と、ま
こと、云、の、行、業、と、不、成、に、さ、う、い、ふ、あ、る、と、云、
と、い、ふ、あ、る、何、ん、と、い、ふ、中、央、傳、車、場、と、
着、業、着、業、の、旋、回、の、さ、う、い、ふ、深、夜、の、さ、う、い、ふ
あ、る、位、に、い、ふ、歐、州、の、さ、う、い、ふ、無、け、ん、は、平
仄、の、合、の、の、三、葉、と、い、ふ、華、族、と、い、ふ、上、品、振

わう臨しに一幅の方をおやうらく
感じに

日本地圖

藤田鳴鶴

大横柄に山陽白旗のしるしを地圖を
畫し國名を注し上の改訂の發行
の文意があらまを講ずる時望
こうけし日本の大勢を指示する
此圖無主のまゝとて小柄な意味
をいへるゝこゝろを臨しに
あまの幅を一閱するも大柄
也

満洲の産物ともその金とも

日本樂府原形

豊子庵次郎

幅尺二三寸の産物にむいた大
書物が行をこおるゝまゝの
り塗抹もろくまゝにまゝの
のまゝ

この人の書とむねに記の序文一巻
七海列をんてあつた

日野資三の書物

淡田徳助

山陽の資三の書の序文と二巻
たことを記すもあつた。序文の
をえりて如のまゝに一巻の序
文に圈點を施しあちから

ニ草しやあり、食ひの二十数行朱を
て細評を施しあり、真にこおし
るき色る也

出岡一巻

海濱子

此の出岡中、柔山に其の字も長岡の中
の猶留教も誦しおみ路大如し
人をも淑貴しする一節あり、山陽を
比人に傾倒し字を以るも又んか比
人お申の力もあらしやゆえ
し大張教に山陽の比人に其の
字も同教も一巻とししもの
あり、大和に在の姓を此も教

て始めてゆく得なり

梅花系は小島 船城男は
吉野の梅とおなりき氣辨を五
六紙に貼し、其の一方に詩一首を
綴しあり、例の「這回何不奉嬉に
のちうとおもしう」

席丸を二

杉原系三

よ切十枚を張上頼立高の歌
各隻に一紙をぬめたるものあり
あり、一見山易の真の紙、料を
後比るも、このころの、その紙を
見るには、皆蕭と云し或る重

いづれの傳ふかきものありき
しげの寺に在りし余の一月、跋をてのりて元
ある年、此を一紙とて、あつては、指しを、跋を
と、及、所、記、の、由、を、し、犬、若、の、教、由、方、の
斗、集、出、を、書、か、え、す、朝、命、を、以、て、又、
傳、抄、記、あり、又、か、高、橋、北、衛、自、名、
文、者、荒、干、あ、り、大、隈、内、閣、改、定、を、以、て、
り、即、大、臣、の、名、を、任、命、を、以、て、
め、し、海、の、七、の、と、知、ら、る、

○此、所、も、い、言、書、地、也、と、後、正、北、地、也、と、を、
る、是、れ、書、中、に、か、く、と、出、作、り、ま、す、の、こ、え、之、
跋、本、に、無、き、もの、也、自、分、を、書、き、し、書、と、を、
こ、ま、此、の、地、也、と、興、味、を、と、て、中、に、書、き、
記、さ、ん、也、

の、所、歴、や、從、遊、の、ゆ、に、あ、り、ま、す、と、い、ふ、
た、ま、一、二、お、記、す、

自家の出身を記す

余は信濃石見内郡飯山といへる所、本多氏、後
守殿をたもて、意々家所、光道寺といへる、西本、
寺末の山寺に、せん、ま、え、来、此、光、道、寺、と、甲、斐、
の、源、公、右、京、方、丈、信、虎、の、二、子、左、馬、亮、信、長、
の子、左、馬、亮、信、量、の、産、ま、り、し、
の、時、五、六、才、と、も、あ、り、し、三、枝、三、中、左、衛、
と、い、ふ、者、信、長、を、以、て、信、州、甲、斐、郡、
比、羅、の、公、事、り、鹽、崎、の、り、も、原、本、寺、と、い、
西、本、寺、の、事、の、あ、り、し、に、初、め、を、書、き、し、

前後皆敬也と云うしるるは一のひ孫へきま
あまの原果方の勅めりて終に後孫に三印
たあつて入道し高家孝の元持を順如
上人の道し其時克蓮寺と云ふ物を賜りて
丸も七く末寺と云ふ極楽の里のうち灰塚と
りてあて候に云々一寺を中と云ふけりか
其後あまの福住し飯山福住と云開臺
ハ正善といひしと余ハ正善と十九世と云
云々

雲竜が先母に候りて孝の生んたことめはしゆあま
リ高麗の父母と云くは名をすまを許さざりし
が終に脱して江戸に出でし初を就きしと云ふは

味下の子伝美濃藩水戸しとあつた人七
中流の事候と云ふ事其後其祭酒のり入
り終に聖をとりりなるに心あつた父母の情
つとを従ふこと出づるに候に一應物くり後
二母は江戸に出る例の先母の位職をたうし
政一は市川寛市より世伝する言を第の本
朝詩紀と云ふに創行するとも云ふ其のこころ
共りなり
雲竜の子伝美濃藩に候りて所あるの事候と云
言伝美濃郡と云ふ事其生れは高家孝の故
と云ふ事其著述七多く有之四家高家孝
と云ふ古文矩軸儲篇王注元子同異絶

の大隈早大総長死去の後、総長の後継者を探し出す
までも世間の注目を集め、その後の総長に就任する
ついでに、而して南洲の総長の記念する書物の為になる
書物の著者としての名前を将来に就いて内容を充
實するべき式多々の好意ある、頗るその後の繁
栄を要し且つ任事の大才を要する折柄、動
くは八内都に暗闘あり、争うて其の地を締め直さ
せんば前途あると實を言ひ、斯る折、四ヶ月前
洋のやりの家内相し約のこころ、九月、塩田は
去て代えんことを希望し、而して塩田は之の徳
の言あり、而人の河を前年に行き、あつて
河産を立し得、ついで河産の疎隔あり、こ

は、在りて、此の考幹部の間、密に議を凝ら
し、先づあつて、高田の主張も、以て、
今、その議を、高田の主張も、余も、高田の
議を、密に凝らしたる、未だ成案を得ず、
別々、以て、高田の主張も、高田の主張の
改正を主張し、終身維持を主張する、
俾、年報を改訂して、二十五年のよう、維持
教授、其職を辞し、功績を行ふ、しと論、
親の改正の主張も、高田の主張も、
高田の主張も、ストロングのメントを心とす、
可なり、と主張する、こゝん、高田の主張も、
高田の主張も、高田の主張も、高田の主張も、

香葉を、すまゝ方乾きるとは、香葉、此次
余のこの書、初に揚げきり、竹林の公葉の額を、
此額、信に始也と左氏の修を、注し、
君人のあり、顔を、危り押、
うしく、此額、
味あること、
本、
とあきり、
お如来、
り、
内、
丹、
12
東田製

畫狂の因、
を以て、
の、
○、
の、
一、
を、
り、
色、
わ、
働、
ハ、

多事多端を聞きし多し 聴くことよ 扱ふことよ 又と云ふ

○米國を先攻の天敵と云ふ輩人の動員をやつて
どんぞ雄略を待たせしや 世界のあつち
民族を包合してゐる國物だあつちいげと云
と後一いつのぬ おまけに冬冬の浮浪人や大
うツちのうまゝ集まらるゝ中すゝ無教
育者う甚しのさゝらるゝことを感したる
じ戦後の世を子として居るも先きを以て
米化せしめ給ふさぬ 又米化教育をも
施さねばならぬとも心力をこゝる迄きの
のあつちの世態を、午後の三時ころの十時

英國皇太子殿下台覽

特別浮世繪展覽會陳列出品目錄

自大正十一年四月十八日至同月二十二日
於平和記念東京博覽會々場内東京自治會館樓上

主催 東京市役所

歌の山 4ヤンピオン 女子から七出の

万葉集の歌をよみよみしるす

東京市野池

神原管世繪刻圖書會刺紙出品目録

英國皇太子御不台覽

肉筆之部

- 岩佐又兵衛 (天正六年—慶安三年)
一 伊勢物語圖 掛 物 一 幅 原 六 郎氏藏
- 二 紀貫之圖 掛 物 一 幅 武 岡 豊 太氏藏
- 浮世正歳 (元和元年頃—慶安三年頃)
三 白拍子圖 掛 物 三 幅 小 林 文 七氏藏
- 菱川師宣 (寛永二年—元禄八年)
四 若衆美人圖 掛 物 二 幅 男 小 林 文 七氏藏
- 五 風俗圖 卷 物 二 卷 男 益 田 孝氏藏

歌の巻の4ヤンピオンの女子から七巻

諸のり巻の以たるる

のり巻のり巻のり巻

万葉集の歌を聴くこととて

- 菱川師房 (貞享三年頃—享保五年頃)
六 書見美人圖 掛 物 一 幅 松木善右衛門氏藏
- 懷月堂 (元禄十一年頃—享保八年頃)
七 美人圖 掛 物 一 幅 小林文七氏藏
- 鳥居清信 (寛文四年—享保十四年)
八 演劇圖 屏 風 二 枚 新 小林文七氏藏
- 川又常行 (延寶五年—寛保元年頃)
九 三美人圖 掛 物 一 幅 小林文七氏藏
- 宮川長春 (天和二年—寶野二年)
一〇 淺草川圖 卷 物 二 卷 井上勝之助氏藏
- 二 春遊圖 卷 物 一 卷 森岡平右衛門氏藏

- 勝川春水 (元文三年頃—寶野十年頃)
一三 三曲圖 掛 物 一 幅 小林文七氏藏
- 鳥居清倍 (延寶七年—寶野十三年)
一三 演劇圖 掛 物 一 幅 小林文七氏藏
- 奥村政信 (貞享二年—明和元年)
一四 女萬歳圖 掛 物 二 幅 小林文七氏藏
- 勝川春章 (享保十一年—寛政四年)
一五 美人遊圖 掛 物 一 幅 原富太郎氏藏
- 一六 二美人圖 掛 物 一 幅 林忠雄氏藏
- 一七 團十郎十扮圖 卷 物 一 卷 小林文七氏藏

歌の心はさびしくなりて女子かゝる也

歌の心はさびしくなりて女子かゝる也

万葉集の歌を聴くこととて

- 東洲齋寫樂 (天明七年頃—寛政七年頃) 掛 物 一 幅 小林文七氏藏
- 一八 團十郎暫圖 (西曆一七九五年頃—一七九五年頃) 掛 物 一 幅 小林文七氏藏
- 喜多川歌麿 (寶曆四年—文化二年) 掛 物 一 幅 服部一三氏藏
- 一九 美人圖 (寶曆四年—文化二年) 掛 物 一 幅 服部一三氏藏
- 歌川豊春 (享保二十年—文化十一年) 掛 物 一 幅 武岡豊太氏藏
- 二〇 須磨圖 (西曆一七三五年—一八二四年) 掛 物 一 幅 武岡豊太氏藏
- 鳥居清長 (寶曆七年—文化十二年) 掛 物 一 幅 小林文七氏藏
- 二一 觀梅圖 (寶曆七年—文化十二年) 掛 物 一 幅 小林文七氏藏
- 北尾政演 (寶曆十一年—文化十三年) 掛 物 一 幅 服部一三氏藏
- 二三 助六圖 (西曆一七六二年—一八二六年) 掛 物 一 幅 服部一三氏藏
- 歌川豊國 (天明七年—文政八年) 掛 物 一 幅 小林文七氏藏
- 二三 向島圖 (西曆一七六九年—一八二五年) 掛 物 一 幅 小林文七氏藏

- 歌川豊廣 (安永二年—文政十一年) 掛 物 一 幅 有賀長文氏藏
- 二四 美人圖 (西曆一七三三年—一八二八年) 掛 物 一 幅 有賀長文氏藏
- 葛飾北齋 (寶曆十年—嘉永二年) 掛 物 一 幅 田村市郎氏藏
- 二五 來燕歸雁圖 (西曆一七六〇年—一八四九年) 掛 物 一 幅 岩崎小彌太氏藏
- 二六 花下美人圖 (西曆一七六〇年—一八四九年) 掛 物 一 幅 岩崎小彌太氏藏
- 二七 幟竿に人物圖 掛 物 一 幅 林忠雄氏藏
- 二八 五美人圖 掛 物 一 幅 服部一三氏藏
- 歌川廣重 (寛政九年—安政五年) 掛 物 一 幅 井上善吉氏藏
- 二九 日本堤雪景圖 (西曆一七九六年—一八五八年) 掛 物 一 幅 井上善吉氏藏
- 三〇 人物花鳥山水 卷 物 二 幅 井上善吉氏藏

歌の心はさびしきものなりて

歌の心はさびしきものなりて

多子湯をみる多聴くとき不快なことを

- 四二 萩の玉川圖 角判 錦繪 一枚 三原繁 吉氏藏
- 四三 雪中男女圖 柱繪 錦繪 一枚 三原繁 吉氏藏
- 石川 豐信 (正徳元年—天明五年頃) (西暦一七二一年—一七八五年頃)
- 四四 演劇圖 大判漆繪 木口摺 一枚 四本萬二氏藏
- 四五 立姿美人圖 掛物繪中 漆繪 一枚 大關藤 吉氏藏
- 四六 美人花見圖 大判 漆繪 一枚 三原繁 吉氏藏
- 磯田湖龍齋 (明和七年頃—天明六年頃) (西暦一七七七年頃—一七八六年頃)
- 四七 雨乞小町圖 中判 錦繪 一枚 三原繁 吉氏藏
- 四八 女三番叟圖 掛物細繪 錦繪 一枚 小林文七氏藏
- 鳥居清滿 (享和二十年—天明五年頃) (西暦一七八五年—一八五五年頃)
- 四九 若衆魚釣圖 柱繪 紅繪 一枚 三原繁 吉氏藏

- 五〇 男女役者圖 中判 錦繪 一枚 三原繁 吉氏藏
- 勝川春章 (享和十一年—寛政四年頃) (西暦一七八一年—一七九二年頃)
- 五一 中村仲藏 舞臺姿圖 大判 錦繪 一枚 野崎又太郎氏藏
- 中村里好
- 東洲齋寫樂 (天明七年頃—寛政七年頃) (西暦一七八七年頃—一七九五年頃)
- 五二 役者一人立圖 大錦繪 墨掛摺 一枚 松方幸次郎氏藏
- 一筆齋文調 (享保十二年頃—寛政八年頃) (西暦一七六七年頃—一七九六年頃)
- 五三 傘屋上下着侍に美人圖 中判 錦繪 一枚 松方幸次郎氏藏
- 喜多川歌麿 (寶暦十四年—文化三年頃) (西暦一七六四年—一八〇三年頃)
- 五四 藝者踊子圖 大錦繪 墨掛摺 一枚 松方幸次郎氏藏
- 五五 雪中家根船圖 大錦繪 墨掛摺 一枚 松方幸次郎氏藏
- 五六 戀の部 物思ひの圖 大錦繪 墨掛摺 一枚 三原繁 吉氏藏

歌の心多しおのらぬ女子かゝる七色の

諸の心多しおのらぬ女子かゝる七色の

万葉集の歌を聴くこと

歌川 豊 廣 (明治二年—文政十二年)

七一 美人春遊圖 大 錦 繪 三枚 山本 悌二郎氏藏

鳥文齋榮之 (寶曆六年—文政十二年)

七二 青樓美撰合圖 大 錦 繪 一 枚 松方幸次郎氏藏

七三 六歌仙喜撰圖 大 錦 繪 一 枚 三原繁 吉氏藏

溪 齋 英 泉 (寶曆七年—嘉永元年)

七四 夜景山水圖 掛物繪大 錦 繪 一 枚 松方幸次郎氏藏

葛 飾 北 齋 (寶曆十年—嘉永二年)

七五 風流なくて七癖圖 大 錦 繪 一 枚 小林文 七氏藏

七六 百人一首參議筥圖 大 錦 繪 一 枚 四本 萬二氏藏

七七 百人一首柿本人麿圖 大 錦 繪 一 枚 四本 萬二氏藏

七八 奇名橋 佐野舟橋圖 大 錦 繪 一 枚 三原繁 吉氏藏

七九 猿 橋 掛物繪大 錦 繪 一 枚 小林文 七氏藏

八〇 不忍池圖 大 錦 繪 一 枚 三原繁 吉氏藏

八一 藤 袴 中短冊 錦 繪 一 枚 三原繁 吉氏藏

八二 日本橋雪景圖 大 錦 繪 一 枚 松木喜八郎氏藏

以上

歌の心は

諸の心は

一面が命令の未大隈仰も國家上の重要の
點三件（將來の國體を以て其名を實の若し
しめず漸次英米の制に因らざることを
大切なる國體）及び仰も政府に立ち秩序
あるは歩を行はぬ要する威権を握ること
と實を（今方に諸事ありて必しも此の
成る能はらん法を以て之を行はざるの
未行はるるを以て改進黨を以て之を
を得は日本の政治世界に之を一掃而日本
の善き慘酷なる天皇を以て之を以て
あらざるを以て之を以て國家の善なる
の之とありて其の後の由らざる

紙上より取りて之を以て
明治廿一年一月十九日
文壇文壇

○書林格書卷々と花の日記の界外本七冊
を以て之を以ての動機及び家系本の分類目
録を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
一部門を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
の類として之を以て之を以て之を以て之を以て
格部を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
と部類を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
この日記を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
して約三千部を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

薬石使用法

一 俗用

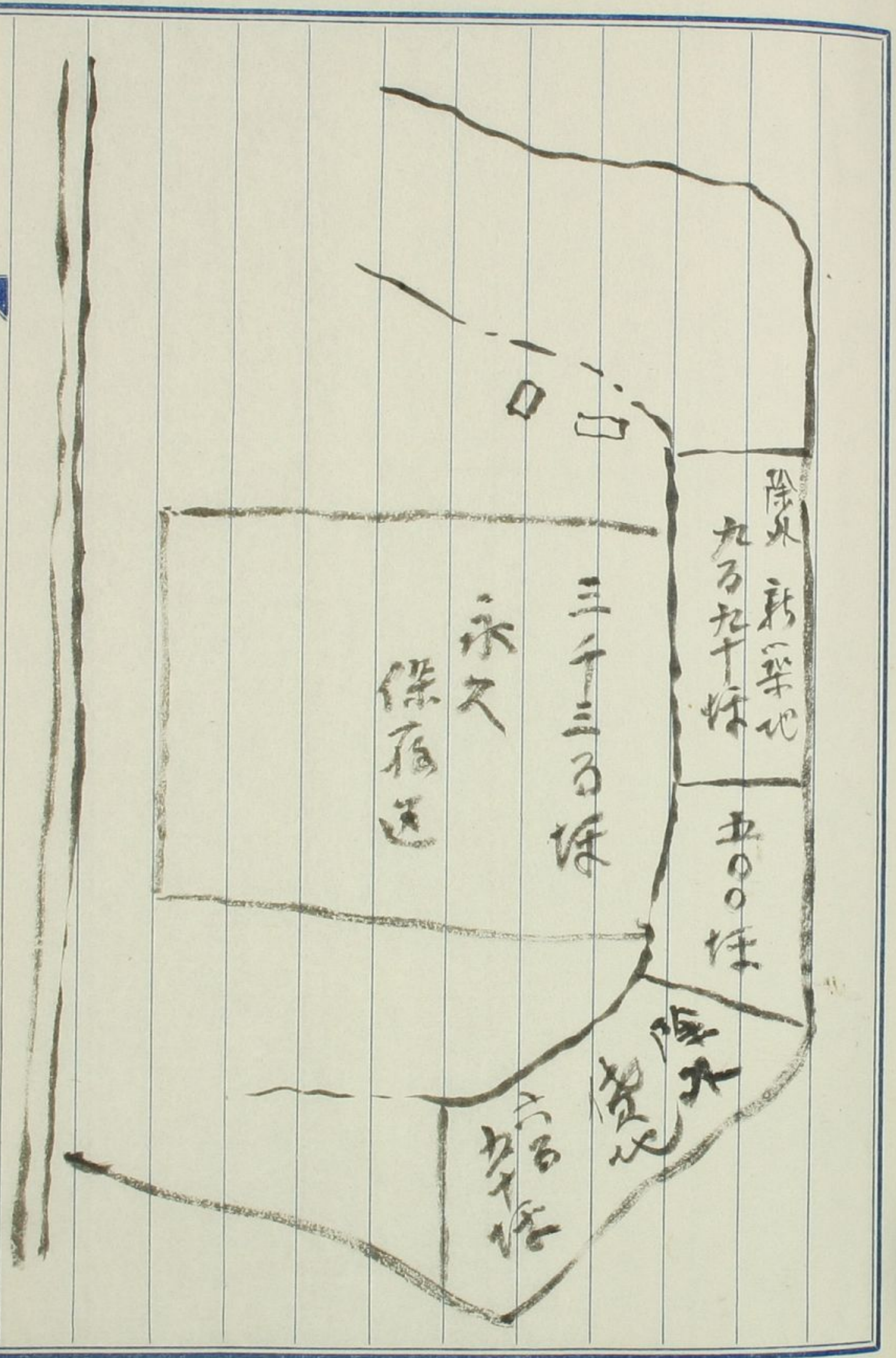
此薬石ハ二百匁アリ此三分ノ一位ヲ布袋ヲ作リテ入浴ニ用ス是ヲ俗槽中ニ換入シ十分乃至十五分位置クヘシ入浴後ハ其此袋ヲ引上ゲ此マニ五六日使用スベシ此古キ薬石ノ上ニ漸時新シキヲ補足シ一月ハ使用シ得ルナリ尚此使用後ノ古薬石ハ金櫃ニテ細末トセバ再度使用スルモ薬石分ニ変リナシ
備考 薬湯ハ慣ルマテハ長湯スベカラズ蓋分強ク浴ノ時睡スルコトアリ六十五度乃至七十度位ノ浴湯ニテ五分乃至拾分位ヲ適度トス此薬石ハ酸方多ケレバ仮令浴湯度高モ肌ニハ柔ホラウ熱キヲ感セズ故ニ温シトテ長湯スベカラズ

一 外用

此薬石少量ヲ(ホシノ一握ニ)糠袋位ハ袋ヲ作リテ打抜洗面器(トクシ乃望シシタウ様ノ)ニ入レ水ヲ注シノキヲ入レ得ル位ノ熱ニシテ洗面器ヲ火上添テ熱シ又ハ熱キ湯ヲ注スモ宜シ)毎朝洗面ノ時ニ使用スベシ(袋入ノ薬石ハ其マニ再三使用ニ耐ユ)又手等ノ皮膚病初レバ右患部又前同様ノ方法ニテ薬液ヲ出シ)洗面器中ノ薬液中ニ漸時浸シ其後右薬液ヲ脱脂綿ニ浸シテ患部ニ死テ包帯シ置クベシ此度効能アリ(但し使用後一時非常ニ患部荒ルコトアリ是レ根治ノ兆ニ合テテ急ルベカラズ)

此の土と薬湯の中にも初めはよく
よく実効ありし未だ薬石もよく
よく実効ありし未だ薬石もよく

○時の維持費等に大隈侯紀念堂附設に件
 海軍記念することと地圖を以て陰分地并
 二部又保存区を劃し決定す大要左圖の如
 く陰分九十九坪を後方の住宅を新築する
 事としその枚も無償にて授與しその陰分使
 地とあるを新侯爵府より一旦譲り後云々の事
 あり由を以て陰分と決しその事の中中央三千
 三の坪を前後の地は宅並に庭つきのありそ
 り永久に保存する事や其地とこの地し知れ
 りし地は任意に或る者譲りすることを得しその條
 解を定む地とす、保存区にあるを別
 記の外、都立の事取上りし得る譲解あり



保存を要する建物

一 木造瓦葺平家() 住宅

二 五十一坪三合

一回 書院

五十一坪六合

一回 便所

二坪四合

一回 浴廊

十坪三合

一 木造石葺瓦葺平家() 西洋館

五十一坪三合

此の又後室より室に附属の家具此等作
品子而内見し其目録の通り寄附あり
りし。此目録守り候旨自ら要するもの
あり、多んを看せ其九と三枚を以つて
田舎懐内より取計し難し、如何なる理
由を以てすも、後室を以てし、其意
を候旨家に再記する、其六も其七も
其九も拒否する、其三枚は換持を

ありき

六月九日記

此の維持をなすに於て討議をなす一問題と大隈家の
 の邸宅を以て附し、是を幕内の謝金と賜ふ
 謝金の額の大なるを以て附し、藉り深後
 を為らん人猶業と認定するん七印の某、
 法律家を之れを危しき或る責任罪を以て
 附し、之を以て附し、之を以て附し、之を以て
 名義を飽き、寄附し、登記の手續
 之を以て附し、之を以て附し、之を以て
 七元東を以て附し、之を以て附し、之を以て
 ことしき

日上記

○人事原の二節前：録す如し、更々上巻に左
 の説あり、前録と併せ讀みし

蓋夫天者能通之故無過不及、自所以生火水者
 無不有過不及、通皆以者常、人有男女、分火水

男火、女水、故男以火為精、女有水為精、
後月一週天以為期

改而去其四也、猶魚頭腦增成、蚌蛤肉多、後且男
 月盈虧為丸、水類皆從月也

皆積、女肉用、亦火水之介也、必有過不及、是
 係男女之所以為男女、過不及、在精血道、為主

者長、因之在外、男是也、不及者短、因入為內、女
 是也、男又有單丸、合為一、女有雙丸、懸垂、是

生精時、由其出之勢、女又有九子、結成多、不
 在舍付者、是生月事、由其入之勢、且髮此者

一 詠史樂府六十六首之第一
 二 芳野懷古七絕
 三 拜桓武陵七絕
 四 題通議後七絕七首之一
 五 題源八幡公過勿來關圖七絕
 六 詠史七絕十五首之二
 七 與信侯山水畫讚
 八 日本外史脫稿戲作七絕
 九 題墨牡丹七絕
 一〇 題通議後七絕七首之一
 一一 水墨山水 杏雨山水對裝
 一二 泊天草洋七言古詩
 一三 讀書五古八首之一
 一四 詠細川賴之七絕
 一五 水墨山水畫讚
 〇三四 答大鹽後素七言古詩
 三五 題自畫山水七絕
 三六 知恩院同竹田觀花五言古詩
 三七 書論語白本後文
 三八 贈雲華尺牘
 三九 龜山夢研春泥鴻跡帖題跋
 四〇 廬同謝茶詩古調書卷
 四一 題烏洲月瀨畫卷詩書
 〇四二 唐詩書卷
 〇四三 額 忠信以得之 驕泰以失之
 四四 額 山爽氣
 四五 額 山水因果
 四六 額 強恕而行
 四七 額 京城雲烟

〇四八 五古六首六曲屏風
 四九 大字六言絕句六曲屏風
 五〇 雜詩七絕二首二折屏風

一門遺墨

〇六一 題關西大勢圖七言古詩
 一七 題自畫山水七絕
 一八 平安上巳七絕
 〇一九 答齋藤拙堂七言古詩
 二〇 送金夫詩畫雙幅
 〇二一 五大字一行
 二二 讀書五古八首之一
 二三 題畫五絕
 二四 六四言聯句
 〇二五 與小竹合作山水題讚
 二六 題畫五絕雙幅
 二七 杜句七字一行
 二八 米法山水畫讚
 二九 題畫五絕
 三〇 歸省途上五律
 池館納涼七絕 春水
 詩經語八字一行 春水
 墨竹畫讚 杏坪
 陸放翁聯句雙幅 杏坪
 水墨山水 春風
 春水示山陽七律 春風
 和歌五首 梅颺杏坪唱和
 斷句七字一行 聿庵
 水墨山水 支峰合作
 鴨厓合作

し得ん

一 今世界に在る(牧)の日本籍民は約五十二萬人
此内市井にあつたもの十二萬二千一人を衆民
の在るもの十五万人カナダに在るもの五千人
とあり乃ち其數を米に在ることを知りて
日本に回を聞いて二十年間に人口溢れを四
分の三を生計を求むる状況ゆゑにして其の元
七多きを米國界に米欲とするなり

一 全体加州を十二五萬方日本に其甚厚
と陰には略々其の廣さを回のし氣候も
日本もよく適なりし、而して其の人口を倍
するに三千五萬人に過ぎず、日本の溢れたる人

口を受へるの危きも堪はず、主よと
支那方面をもと土人の信義は約々々廉は
別産日本が動ある、其の統あるし得る
不便あり

一 米人の自國の出地を子孫を以て支
那の方言を有るを入れば、漸く其の
作しに於て千八百二十年に、支那の方言を有る
く一掃せんことを不便を感し如女に
とを以て其の味を有る日本人を入れて見れば
ぬらうも七働なき米人の能くする能くあるこ
とを以て、いんり抑り日本人の入り込めぬま
りて一千八百九十年に二千人の日本人を

男子に物乞ふありて、世子と米吉の女子に比し
 吾にありと云ふ、いとあはれなり

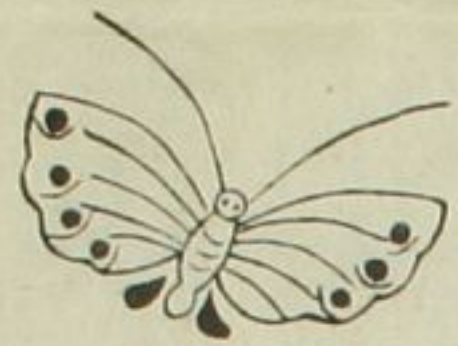
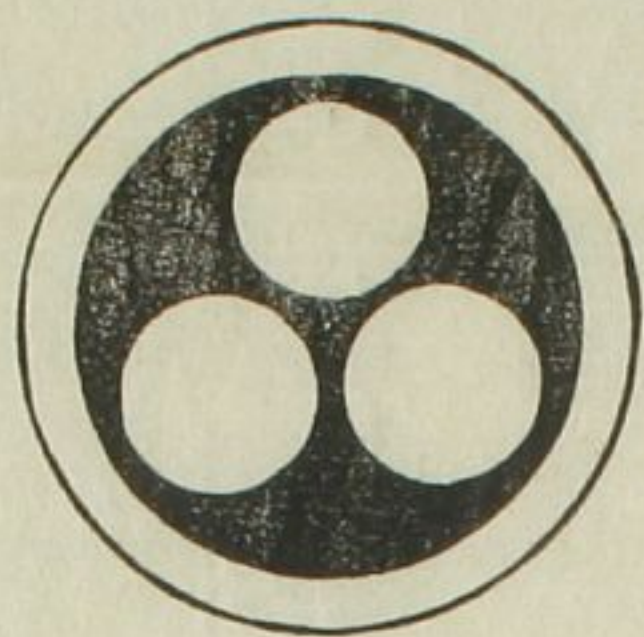
○六月十日、日暮氣大いに加ふる、晴まればつきき二四時
 に海より北城新橋の橋に、さざり大股後の名、
 油の火を燃す。不化を福候と云ふ、
 今の漸く定法新橋に揚出中は多分二十
 回と云ふ、田舎新橋の橋に、千と揚しき記



世宗の御



風流四方屏風



水車屋之女

○六月十日 日暮集大いゝ加ふる、暗まればつき三時
に満り北城新納の宿に立ち大股後の之間
油の火圓する不滅を福致しとちり母せしめ
今の漸ゆく定後新火に揚出中は多分二十
回とちりせん、田舎宿のよきこと懐しき記

男子に就てありて世子と米世の女子に就て

本を勤むるは其の要に收めおく。 坂口五峯が
 校訂に甚心し其の伊藤香雪の詩笈二冊余
 の二卒の印刷令此に排印し漸やく成切
 りの案紙に首尾の香雪を余の同門の五峯
 つ不才の詩人とし其の先代も其の詩を
 へき也。 此の香雪を過る三四の圖を
 得中。 稀覯の中之あり。 左に記す

一日本詩選 續篇 七冊

北海江村翁の口を以て選ぶる必
 ずしも珍くしうもえんも 續篇を
 稀也余二編を花より年ありと漸
 く續篇を併し得るを得るを去

花乃心
 心乃心

右 盛昭



右

盛昭



月小都そん
飾ふ杉水の産

こぶ但し傳き西條に二倍して十七回也

・花壇朝顔(前)

二冊

文化十二年刊すも各回に似俗を配し、
し、
おうと床にありしものさんとも今もと
跡とさうさう且つ此種の本を其ま
る孤子家のなるといふく、
此本二冊代二十回也

・性命圭旨

四冊

支那の道も書冊の体横廣より版式
六書(前)の本と同じくさうさう道も式
とさうさう二種の形に挿画あり後

月小都ろそん
 柿山抄本の體



こぶ但し價を五倍に二倍して十七円也

・花壇朝顔(前)

二冊

文化十二年刊すゝ系各回に例格を配し、
 其尾尾培養法を附す、一時之テラ
 おうと店にありしものさるる今と
 改むとさるる且つ此種の本を真実
 る好む家のたるるといふく價昂り騰
 此本二冊代二十円也

・性命圭旨

四冊

支那の道書冊の体横廣より版式
 六書(前)の本と同じくすゝ系道書式
 とさるるへと二程の形に挿画あり後

あてあらの収録あると云ふ

一 羅浮幻術

一冊

梅の画法を記したるもの(和刻の地)

お六瑞本等を欠りし

・ 黄石齋(道周)石養山岳帳 一冊

石養山岳の十雨軒系に九率

淵に五十有六人の故名賢之贊

を掲ぐ玉塔八分吾石川文山

の活仙巻に三十六活仙を掲ぐ

とありこれい、梅の類八分書に

相似たるを宮原う一書と云ふべし

此の午後訪風：洞外して友人新村出の南

書比を後あやむるに切支丹版書家あり

の者あり、未だ全部を後しむるに未

此書家あり、正利代の相を云ふ、似たり

詞を以つて問答体と云ふ、是を如く

あり得たり、爾を我邦に刊行するに一部

とある、あはれ、僅に、其のブリテン

にアサに存するもの、惟一のよめ、其の

就し、あはれ、破提字子を著りし、ハ

る、一し、あはれ、致し、此のよめ、

傍ら、一し、あはれ、あはれ、後、

に復し、あはれ、あはれ、あはれ、

六、其名の切支丹あり、似たり、

六、其名の切支丹あり、似たり、

らう故るんときう

二月十三日録

○古利子丹版と唱ふる活字版を郭敦徳のコレニ
やういふは、活版技術をあたふ来つたのが如きう
て、多えう其古版活字版も早いときふこと
と解し見えあつたので、指さすは、多えう早いこと
べしとて、そのころに、河村出さるんとて、その時
たのめくそのころ

室七角七西洋の所増る遠西の序
書かう傳本として、最初の活字本は、我ら
西進の刊行とて、そのとき秀吉が高麗へ
先づ一二年前のこととて、あつた。その
の初版活字本は、古文書(供)が出来た

文禄二年(一五九三)より二三年前、最初の
私版活字本補注書求の出来は、文禄二年
(即ち一五九六)より一五九七年前、現
存する初版活字本錦細版の出来は、文
禄二年(一五九七)より一五九七年前、而して、其初
の活版ともいふべき、此考家語の出来は、其
年(一五九七)より一五九七年前、而して、
最初の銅活字本といふべき、直江勘六臣注
文選の出来は、其年(一五九七)より、先
づ、そのこと十七八年、而して、文禄の初版銅活字
本より、駿河本大花一巻の出来は、其年
文禄二十年(一五九七)より、一五九七

十六年と致へらる。而して老若の吉刊支丹
版と印行し比工人等の名ハ義忠の宣華の二
集ル見えり。慶安三年^{即洪武三十七年}活字の支
那の活字ありる。陳孟平や陳伯壽或を
同年月江陰縣を刻し。又嘉慶元年<sup>即洪
十年</sup>五七
一三八七
柳文集を刻し比俞良甫の如く傳
はらぬのは止むを得る。いけんもあらず。
ニヤーニの名ハ三聖、崇信、素庵、織船の
徒と共に傳へる。又加津作、天草、長
崎の地ハ伏見、駿府、嵯峨、オの名と合ハセ
て印刷史上ハ記憶せしむるべきものと
思ふ。

日本でも分を印刷術に傳へて來たら。支那の
いふところと在り。上海の印刷を考へて海
に傳へる進歩に及ぶ。活字の宋版式のもの
工賃の比考へる。唐の所より、往々日本に
る。支那の印刷を伝授する所も、いふ所も
ある。板本は未だある。別して上海の石印の進
歩、若しいものもある。今より五十年前の
支那の印刷も、定らる。上海の活字の進歩
の如く、日本も之を何とて伝へる。支那の
人びと、支那の支那の如く、支那の支那の本
木が印刷術に甚しと伝へる。上海の如く
ある。

元長崎の通商にありて木下尚江(先)が苦心経
その末西洋の活字装束(先)の技を傳習し
この間に東洋に印刷術の光を照らす
ものれ由来の文化史のた物考にてもきき
富多の物があふか、前にも昔人の不脱
の字も、傍つくと宋人の技術を得たの
あつて殊に後者あつたやけに皆誤かぬ
以降の活版術の淵源をたつたの心ある
新はあつても、ちぬ活字の先をたつた
し、以て造るに其成績の良くあつたの
上(海)に米玉の字を、あつた活字とて
印刷の美華(先)とて、
(American Pressing)

London Mission の印刷術の
其術を傳習し、とて試みたり、其を
秘しと果てしなく、あつた活字の
重印厚之を、亦上海に活字を
を印刷を、試みたり、又張り不
機械及び活字を、一庫中に納め、
あると、ついで、米玉の字を、
結果の、あつた、遂に米玉の字を、
キ *G. H. Verbeke* の、
活版術が、*King* が、
と、ついで、ついで、ついで、
あつた、ついで、ついで、

傳習名として書き流字鑄造の術をおおるさ
せられた我田新代流版術の基とすうたの
あふ、ハボン J. C. Heplburn の和英辞書のあき七一
八六年(昔々三年)の初版、一八七二年(明治五
年)の再版が上海の *American Presbyterian*
Mission Press であるが、我田の印刷
術及び印刷物が斯様であることは、交に格を
新報の字交ありとあるものありと其昔々
昔々の流字格を田友の留書館に徳が天長
寺に格を印行本を譲けし出版に從うし
つとを志記せしめらる

○昔書坊と流字の模本流字本一と得られた文化元年

平山兵衛の劍徽のあふ、ニヤのあふ其々の
くけし劍道と関係ある流字集あふ、其の
の流字交り、流字を分れしもの、門人高井四
幹が明治三年印刷したものを、流字印
三流版のあふ、珍本の二と謂ふべき、前記の
明治初年の印刷史の二材料と見るべき、
あふ、愛に大略を記してあふ

大正十二年六月十四日記

○六月十四日午前十時、大隈邸に利の前田に引
つとく、同前、午後四時、つとく、左の者、前
一、つとく、午後、中、つとく、つとく、つとく、
つとく、つとく、つとく、つとく、つとく、

竹添進一	徳方寺	流河	楠本守隆
外田友	伊藤崎又	民部省	唐平海
山好	あ川	岩村色俊	神田元宗
海江田信義	杉方正義	坊城武平	野村結
海江田昇	中井弘	五代友厚	
前山春	三條公		

此等土間の河川伊藤杉方三條五代を多く各
 流に上る流石に伊藤は取らざるを杉方と
 うすし凡そそを杉方とせよとあり三條は
 天のまゝの流河中井五代は比較取
 入るもののありす全体をみるに
 べしこのを得るは併し此の由り治史の材料

とるべきものありと志便の條に材料とるべき
 ことのありしなり

徳大寺や坊城等の公面を幕府のりて海
 軍の十の八九を占む刺客の自衛の以て幕
 中を以て幕府の年額七割を交付せんことを
 あり毎年二季に半額を交付せんを以て
 法もあらず、幕府の法令の制を各々議一
 人つて幕府に其案を提出す定めしむと元
 しく幕府の直と順次書も見えたり、陛下
 が維新橋を臨幸し仰出なる際、河津を
 古ちり

外國官の志而成るべき中、あめりか外交

去更ら伊達守和島侯よりし、要ふんを殿様
とて吃に威張りくさるゝと其方内なる御
大畏侯執り居たり。御るゝ。パークスをも
西洋人をも責任ある大に、あるをいふ。念ハ
たる為め、一、下河着ありたることを報し、
あるありあめり、御るゝ。

海軍のあり、のあれ、のあ、を井上とおれ、
御親なる御方の長文の、御あり、海軍の
、海軍も、を、と、不満足、一個、と、を、
、を、を、を、を、と、を、を、を、
す、と、を、を、を、

事ある、雨あき、中井弘の、御あり、例の、御あり

沈み、を、御あり、を、御あり、を、御あり、
リ、三四の、御あり、を、御あり、を、御あり、
モ、二、一、る、御あり、を、御あり、を、御あり、
す、二、六、形、の、御あり、を、御あり、を、御あり、
ある、御あり、を、御あり、を、御あり、を、御あり、
奥、方、交、り、を、御あり、を、御あり、を、御あり、
を、御あり、を、御あり、を、御あり、を、御あり、
ソ、ク、を、御あり、を、御あり、を、御あり、を、御あり、
直、し、と、御あり、を、御あり、を、御あり、を、御あり、
例、の、ハ、一、ク、ス、殺、害、の、御あり、を、御あり、を、御あり、
後、に、就、て、を、御あり、を、御あり、を、御あり、を、御あり、
ある、御あり、を、御あり、を、御あり、を、御あり、

皆邸内の一隅に本をりて終つて同く
つらき未亡人隠居の地形固めは着
手すと又同く未亡人者^神と評く本
初めは暖湯を試むは十年後初め
のころに又此の報を祀るありて
室美の書も居を付ひまう余のこ
り選ひて五十年家の公間をすむ
居をせん存なりを為さくめ撮影は
心と終る 二月十四日

○披神記を著して後此を支那と代のこつ口
ジ也晋紀二十卷を著して名を傳へる晋の
干室若くは傳る續言由を陶淵明の撰ふ所と

いふ余の贈ひける本も元禄時刊する本
も巻尾に一色時棟の字あり干室の地を
も著する動機亦ソロジカルなる事なりを叙する

室父先有所寵侍婢母甚嫉忌及父亡母乃生
推婢于墓中室父幼年少不審之也後十餘
年母喪開墓而婢伏棺如生載送徑日乃蘇
言其父常取飲食與之恩情如生在家中者
輒語之考授志願云室以此遂撰集古
神祇靈異人物變化名爲披神記以示劉悛
悛曰卿可謂鬼之董狐矣云々

の藩札を以て自ら七呼び人七呼びに指す前田博
ハ大改の今と申さる引揚り或る資本家の
授勅を得て金を印刷に充てたる所を
比と云ふ先此の一面が申す所を
のちの部令を合本に改め申す所を
年七尺にことあるが申す所を
の合本を改め定価の域に在るとも云ふ
と申すに比しは申す所を感し比しは
を著きつけしを申す所を
札の精弊をいひ、金を扱めて稀難の
る

寛文の精弊ハ

同二年福右(福井)七も
出十のいある象と物子の
田うちつる見を行ある
つる末七印在工つと
体勤り大伴末世の藩札に似
てあり
え札のれを大改び申す
行えを札換をいあるれの上
左の文字うとあり

攝政大臣
江戸堀河
銀札
用之

伴と物子の圓の朱印
おきんをある

新古今の精製りも例も七葉の
鏡もある 前甲も活れ又学とを
精とその鏡のみを備はるしとあるを
の好みを借り受けたりと此記りの
終りはおす

廣れの標本

とそのを一冊整理してよのを見て
の興味を成すに、もく廣れ道と
十幾何等と二十幾等と半圓と
山を改め、背西のちもを改めたり
ちうに、さうく廣れの行程を
とす

折りもある、裁きのまじけり板
を今に中へ改定して文章を挿入
ふ極極なる考のに、年教り
地、冬記り、さし、及行し紙
血一冊のれを五冊に改めたり
言丈改定して洋教り、手
其後、さうくあると注を
此才廣れのゆも大改の
疑をさすけしといふ廣れ
坊の何れも廣れの二冊
質と印肉ともあるの
う原稿と変らぬ、さうく其
獨色

巻の版を偷んて用えしものなりと云ふは、
明の初年、各ある始り、こゝに先づ行はせしめ
ありし紙幣も、も極つて長に、中は紙幣の身
四折りしものなり。一と名をええし、こゝに
余り、伊豆家、市時徳次郎の、ある書
し、こゝに、宗家も、中一の紙幣ありし
こゝに

札を發行する体にて、刻印を為す所は、こゝ
校の式のあること、を今から切つた、一校式
も、小切手のこと、一枚毎に、小片の附帯
する、其の裏目、刻印を捺して、断裁
し、そのひき、前回の、コレクシヨンの中、其

刻印の、行合、するもの、こゝに、
其の、ある、又、七、一、の、形式、と、大、一、枚、の、紙
こゝに、多くの、米、番、號、と、印刷、し、その、米、番、號、
こゝに、合、つ、て、刻、印、を、施、す、こゝに、な、ら、う、と、し
あり、此、形式、の、原、因、は、用、意、と、余、り、前、回、に
貯、え、し、の、を、有、し、て、ある、こと、前、回、玉、表、の
紙、幣、こゝに、此、の、所、に、海、の、米、番、號、こゝに、付
合、する、もの、こゝに、四五、あり、し、その、中、の、紙、幣、の、身
、其、格、紙、も、紙、目、に、鞆、で、刻、印、を、
い、せ、て、あり、し、
冬、考、る、事、ある、と、あり、し、極、度、こゝに、紙、幣、中、の、紙、が
行、し、紙、幣、ある、十、種、を、一、つ、に、ある、は、た

祝此園子無信不立

四分

裁精代銀信如四時
粉郎如龍十畫如脂
毫釐勿忽上天難欺

五分

范範之晴皇極樞紐
天人物理國內輔濟
感此會子中數之錢

壹分

恭饒速命天授瑞寶
歷世相傳鎮人平服
扼彼舳舻變劑之禱

壹分

日月相望生理無二
播精味目天地易位
交易易勿私萌哉此事

貳分

魯論刺篇言之金玉
百姓不違君孰與之
惠而不費用鈔之鵠

明石漢

銀一匁

善哉者何風夜吟也賀
世者何風晨吟也鳴斯
不致福焉有真仁鳥也况
其蘇守朱冠翻字靈噴
可以昌文也可以徵沈也
蓋亦有庶市之此也
宣統三年庚午冬十月
播州石銀會

白石山
銀九百十目

制産仁政之餘務生財
至治之餘先勸飲玉英
齋食嘉木遊聖悌和交
易之義可表内角因歸
富給之慈足是見施德
澤千園郡斯祥瑞于千秋
寛延三年十一月

播州白石銀會
蛭島作

小泉藩
錢五百文

河堵一抔大益代有殖
干農于商此為桑斯
交易不待權而足未維

每百貫而可

節侯之政不易之器千
金子貨之流編戶民字

寶曆十庚辰年

札所小泉領八個村

庄屋 年寄

奈良屋忠太

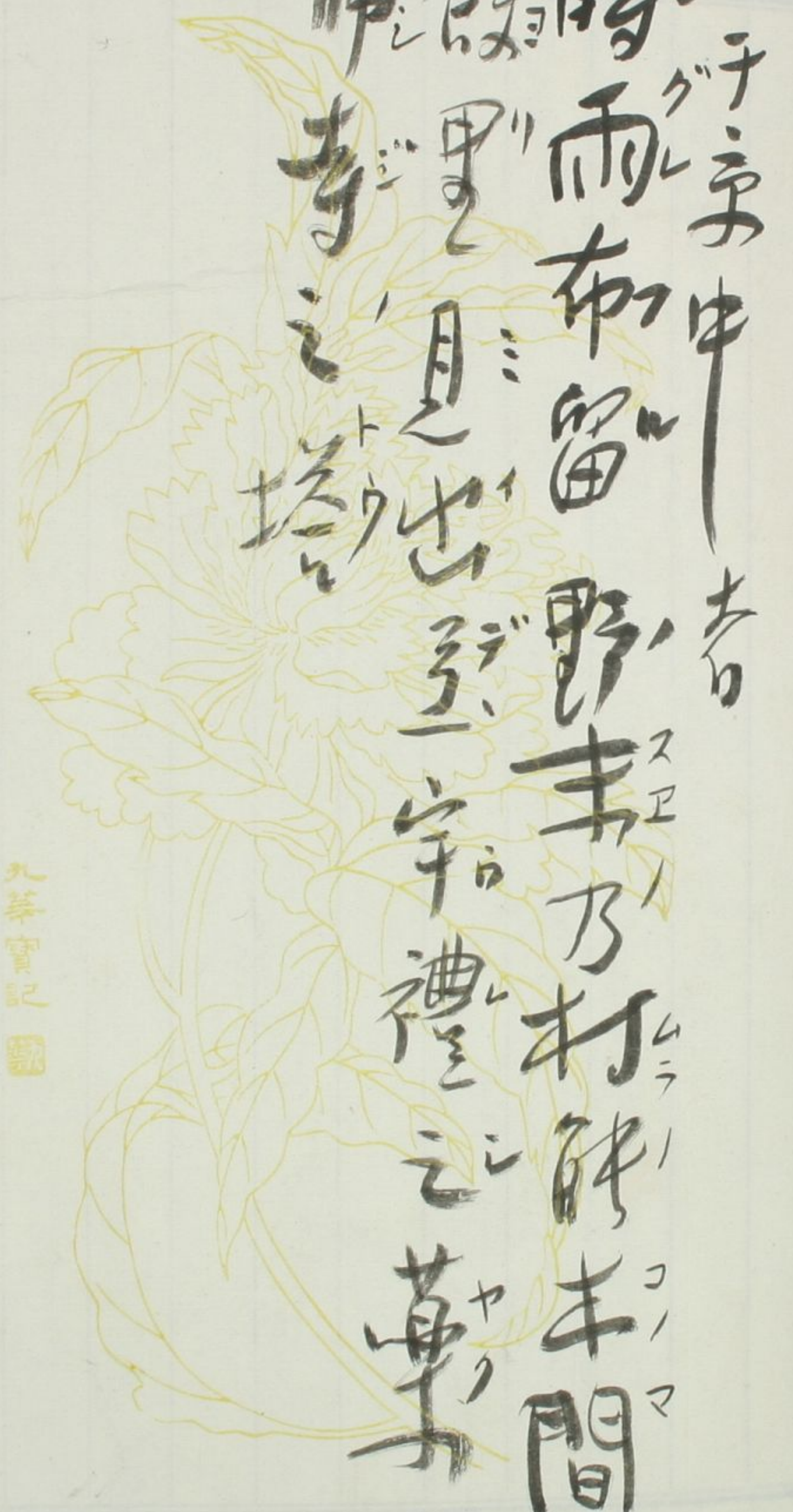
此種の銀が多きを他へ略す
一説を尋くす
六月十五日記

の分は二一を何日感し
禪を主りしをその左の
いふと先づの記碑と
を建て、死後事蹟を刻す

會津初字ハ初多秋物道
 幼美古俳語出ニ実字又于早稻田教
 通閑庵路晴古常遊吟行
 四方放情山水間曲遊南部
 嫩子山云云其風色不神
 謂人曰是處青月山宜是理
 骨辛葬其其村乘後復有月見

之于京中
 時雨布留野末乃村
 餘里見出至宇禮之葉
 師寺之塔

九華宮記



師是に格を予に示したまふを、工匠の家屋を
造んと欲するを、先づ其の無物を利くし
漁人の漁船を獲んと思ふときんば、是の従
を従ふの着くことありし、是の國を尋ねて
来つて、天の御法を説かんとするは、此の
の風俗を切ら、又之を法を達するべきことあり
らうか、此の條のゆけとらるべき
日域の世を我々のよき言ひ、様々鑑ばの
んさう、汝其をを導く人び之を編めと、吾元
より又淡うして大程し、かの及所ある
さるる由つて、千辭着退すし、是、サ、オ、ヘ、チ
エ、ニ、ヤ、の、古、に、任、せ、是、此、を、論、せ、る、貴、命、に、

従ふものさう、然るば言ふ事をいふか、日域
の世を我々のよき言ひ、様々鑑ばの
山の住侶、文才の名高き言ふ法、即ち衆心
す家の物語、若くは、あ、い、と、思、ひ、之、を、選
んで、出、言、せ、ん、と、決、ま、り、臨、ん、び、又、我、の、言、ふ
は、今、此、の、言、を、我、の、言、の、如、く、言、ふ、の
事、お、お、お、し、旅、族、を、た、す、か、如、く、言、ふ、の
手、お、お、お、を、お、お、お、と、言、ふ、其、の、言、を、
ぬ、お、お、お、下、の、上、を、上、を、上、の、言、を、
何、か、本、を、勉、め、す、ん、事、を、取、え、ん、や、お、お、お、
賢、か、ん、と、言、ふ、は、其、手、お、お、を、考、へ、一、隅、を、
お、お、お、か、る、お、お、言、ふ、の、手、お、お、お、

にあらず、此の世の風俗を以て一人の教多のを
有任の務りあることをも廻とてしとてさう、故
いかんともんば、是れ物の理を乱するゆつて、
他者のとをなすをるえとて、初心の人の為
ハ大さるる妨るる、今此の言を、そのんを
自他合たつこと、今も以て別の儀のめ
お、豊々きし、御主せえ、キリストのエ、ア、ン、セ、リ
ヨの御法を弘めん為るん、此の志乳の便り
とてさうとて、これを、皆、以て、除かさんば、ある
可らば、との儀さう、余退いて、思ふ、あるをか
あるん、此のこと、減る、其の、溜る、さう、さう、あ
ず、一々、以て、皆、お、り、仍て、此の、志、乳、の、言、

所、之、を、な、じ、い、の、命、に、従、つ、て、朝、り、を、あ、は、の
指、ぬ、く、受、け、ん、こ、と、を、願、ふ、が、此、物、終、を、力、の
及、ふ、不、り、本、書、の、言、を、あ、と、あ、つ、す、を、な、し、校
と、さ、う、し、た、る、もの、さ、う、伏、し、と、ら、お、場、雅、の、之
子、之、を、後、ん、び、坊、深、う、し、と、オ、の、難、き、を、願
弄、す、の、こ、と、勿、れ、時、に、御、出、世、一、五、九、二、ニ、テ、せ
ニ、グ、且、十、不、地、フ、ワ、ビ、ア、ン、謹、ん、び、出、す、

新井傳士甲

此の傳言も見るも如く、あるお節して、校法を
す、如き、前、法、式、の、傳、言、え、ん、る、不、最、力、さ、う、し、と、さ、う、
こ、物、終、の、人、教、と、し、衣、馬、え、と、ま、一、校、板、と、の、
名、二、人、を、點、出、し、換、校、の、坊、平、家、の、由、来、加、や、ま、

又ごとあどとうにせられうはとん重く讀みこ
きこして全編を結ぶ

新打海士續けし後

今ある本文の標ちを弄せん。才一卷、才二
重盛父法書巻の法多きを留し、卷二の傍
りの深いと諫めらん。其の謀りて執力を集
めらん。書いの中、重盛諫言の一ツ即ちを
指し

右馬えりて、まうちつとお續けせん

きこは、^中後あつて重盛涙を
押して申す。此の御せをよきこし

の運、早や素まろのれをなす。人の命
命の傾あろうとせば、必ず悪事を思ふ
つゆのむこせらる。又御有候更らうつとも
見えん。大臣の官も、人の甲
由をよりうこふこと。礼儀を習ふこと
いざらるいふこと。此中に御出家の御
身のこせらる。こえ由りて、既破戒無慚
の恥をねらう。又仁義礼
智の法も、おろす。傷ちやかた
きこ申し。ことむこせん。かむの産
し。言致を、幾きうする。儼びこせらる
んは申上らる。世々四恩がこせらる。多んと

いふを天地の恩、四王の恩、父母の恩、衆生の恩、とんび、こころ、其の中、最も重き朝恩、こころ、普天の下、王土、又、あつて、いふこと、ハ、こころ、あつて、いふ、ハ、こころ、唐土、ハ、かの、新川の、舟、舟を、洗ひ、首陽山、の、嶺を、おろし、霞の、命を、継い、て、賢人、も、勅命を、首き、難き、礼儀、とは、存、り、た、と、を、承つ、て、こころ、い、か、ん、況、ん、わ、先祖、にも、未、れ、や、かの、大臣、大臣、を、極、め、て、を、え、ん、切、う、申、す、重、臣、も、恩、か、ら、る、る、身、身、も、こころ、こころ、あつ、て、内、大臣、の、位、も、あつ、て、一、か、の、あつ、て、四、郡半、は、一、門、の、所、領、と、あつ、て、回、つ、て、を、

一家の身代とあつ、て、は、像、は、希、代、の、朝、恩、は、は、こころ、な、い、か、中、臣、も、重、臣、も、今、大臣、の、大臣、こころ、あつ、て、然、し、心、う、表、の、朝、恩、こころ、あつ、て、其、恩、の、重、い、こと、と、思、ふ、ハ、千、顆、万、顆の、玉、も、一、入、再、入、の、如、い、も、る、(き、を、お、は、す、ん、は、一、入、再、入、の、如、い、も、る、) 院、中、の、冬、も、花、も、あつ、て、其、朝、恩、も、重、臣、が、身、代、の、命、も、代、り、つ、つ、と、契つ、て、侍、も、あつ、て、こころ、あつ、て、こころ、あつ、て、し、具、も、院、の、御、所、を、守、護、し、ま、る、と、あつ、て、さ、ら、う、は、い、さ、な、か、以、て、外、の、御、所、も、あつ、て、こころ、あつ、て、さ、ら、う、は、い、さ、な、か、迷、惑、も、あつ、て、あつ、て、君、の

御ぬれ奉公の忠を改てうさるとすんは、迷慮ハ
著の頂きしうもち高の父の恩を忽ち忘る
に、不孝の罪を犯れうとすんは、君の御為に
に不忠の逆臣とらううす、進退こころ極
まへて是れいかにも多難の儀にや、野
今も侍人に仰せんと、御つきの御より引き出
さんて、重盛が首を切らうことばや、
い程の事か、こころを、こころをおろく、せえ、
直衣の神もしほるは、うに涙を流しかき
く、とわんは、其の事、無きとえ、
の人、こころ、こころ、こころ、
は、こころ、こころ、こころ、

世流に和らげたり手紙さうく、
昔、前年早稲田の出版部が、
物と和らげたり、
を流す、

二月十日記

守家物語を和らげたり、
人、後破提字子と昔、
る、言、わ、あ、ふ、
原刻本と元和殿、
の、稀、親、の、中、の、
し、本、を、大、捲、の、
人、の、見、て、
え、和、の、原、本、と、
横、綴、本、を、
中、子、
加、徳、
の、
流、
の、
助、
の、
物、
の、
得、
と、
さ、
あ、
む、
し、
今、
も、
あ、

正にありし、稀に復た元念を復たせる
也一案と思ふ

の二あり、早回をを逆り得たるもの内、福に叙
すべしものも左の如し 六月十日終

一 西湖志

二十冊

雍正の殿版 版式康熙に倣ふ
字体と共に流石に鮮明な心
也

一 澤陽列位

一冊

僧徹定古經卷終者、流字
版に附し、終者ものも
めしあり、稀に別々、流布

し、稀に別々のもの也

一 平安懺悔記

一冊

大典祥河の漢文を、天の
京都の圓祿の状を叙して、
これ門人の細注を施して、
也、天の八年六如の序あり、終
数序跋共十四枚とす

一 蛭岩叢書

四冊合一本

梁田悦翁の集也、寛保二年
の刊に係り、古書に桂山彩墨の
序あり、赤石流芳閣の上梓す
とす

一 長崎地名考

三冊

此書の昭和廿六年出版の頃より正に
九の何なるに此を考へた場合に之し
高き事や、この此を考へぬ

一行尾の考

三冊

武元登に尾の集也自書を取
るもの、物数寄り板に山陽の
行尾、尾の尾の尾併し載
す、坊に飾らるるもの

一 馬銭の占

一冊

え縁政傳入みくら日本に其を
三個つて天地人のふさを記し九個

12
田田田

を授けて其の出ル字を本に就し
授け、その字の文を見て判断する
ののあり、え縁政の揮画は何と
る、縁政の考

○新村尚士の南東紀中………物録し置へ
きよのあつと吉村支助の一字を後集集し也
とん日本と通しし世界のニケ本に備へる
るもの也 新村の元しと英國のニケ本に取
すもの、え、もとと、尾の流東子の尾
をサトウ婿の之れを本名のニケ本に寄
贈し、そのもの、自人も多く、此の考

七内字を以て終るべきことを得ず、其を以て序
用集の終るべきことを得ず、其を以て序
洋人の指導する所を海軍省に譲りし、其の
く、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
ひらき、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
何人七之れ、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
先づ表紙を見る、中央に、葡萄園の紋章
を印刷し、其上に、南十字星の紋章
を以て、RACVINOXIV 即ち、ラクモール
集と題し、下あり、耶蘇會の日本
林に於て、長老衆の御免許を以て、一五九八年

と羅旬語を以て洋字を表はせり、出版年次を
本書の中より拾ひ、再び、亞刺比亞教を以て
1598 と記し、即ち、我々、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する

是のついでに、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
あるは、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
ハ、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
の不足と、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
びし、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
母字を以て、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する所を、其の達を編纂する
集の終るべきことを得ず、其を以て序

能くても也

二月十九日記

○の末に侯繼國う若りしに全浙兵制の附録
日本風土記のあり、こんど日本の歌女時代は板山
代よりけしの俗謡なる十二首歌のそと、
もともと言ふ所謂和歌が波土に傳へられたり、
日本に流行した中供謡ひある、やまを車根を
ものとも言ふ隆達即ちむらさ、皆漢歌
ハ皆華を倭風と云ふ言ふをいふべき、
この言ふ言ふ漢も、語句と解釋し大言
をいひしあり、えと漢と何をもいふ歌女時代の
者あり、ハ隋船や新代も海賊船の乗取
かえん言ふ氣心場ふに其あり、うやこいへの

抄る氣ありしと外國の國なるあり、
一傳おもしろく感する

いとしの原やおいしの原、とせん
そら屋よ、暮るは井敷ありに

いんう夫婦あ接と支那人う題を合書し
る記で、新古時代のもめの坊、
としてある、月夜和情

十五夜は山宮の曇ん、曉さえよ、
七とそよの、
傲御

あ女別郎
十七八と寝て離るは、
よの、
たい洋の水はるん

ち春歎世しつち

十七ハルニ夜をろか、枯木、花が咲き候のあ
女嘆配選しつち

眼をくんとせえ、川舟よま、総てうらなけれ、
いつまむ。

陸連ク郎と思つては

峯の松山さ、う浪は紙あとも御身と我
暮い午代を寝るまむ(あつた文句の書かおあ)

いあんど

外の片言交りのゆるれ交つてあふ、西湖の如き
を西池、好大屋と云ひ、日本中の無しとあふを
「無うおんじやろ、日本中」云々、西之く系

をそのまうに寄してあつた所滑杖方ろろ
おせしろい、南史記の二つ節をよきと

しと北史記

〇六月二十の折田忠治、大隈家のゆかり、
つき種々の秩令あり、一、未亡人の原書つて
出ろろちら、價換しつち、二、関す、うんを故本
土版馬とつて、つとて、話と合せし後、録載
すつち、三、先づ、折す、きと、大隈侯の真
蹟、披ふ、しつち、折田の二、年する、報、ゆ、地
う、新築、紀念、を、大隈家、不、為、の、名、家、を
尚、と、復、ね、ん、五、中、を、能、と、二、小、書、と、る、え、ん
を、綴、り、あ、り、ふ、ん、と、する、針、書、あ、り、を、前、見

り出し得ざるものなるは陸奥の石虎の言ありき
言ふにしをば行と比較するも其の体は
もあらずと余は謂ふ、全体に任状にお
格者も保るしるべきものなるも、早き
頃を其の高談の官吏私権とありしこと
もあらず、陸奥伯之大隈侯の自書を以て
しと殊に類ありしと掲げたりと言ひ傳へし
ある、此の信任状をスキエと條約改正をぬ
す折のよきと見えたり、さき先侯の著書
とありしと得るありしとありしとありし
うらうらうと感しき

報知社出版の公同集、何、読むべき

名を撰ひ其のよき、善悪を述べ
を所由も述べありしを、自今も
は、跋をあるも一冊子を添へ
：自今、年々間あるの休書やお感や選
擇の次第も、略記し、今と自今
より出し、先は其の世に於ける
話をも、公同集ありし、物向を
語りたり、所由も、即行するも
：報知社、連判し、即行するも
（き、そのを、報知社あり、
余の、後、を、約、
似し、世、に、

菊池澹如先生

菊池澹如名ハ教中字ハ介石澹如ト號ス下野宇都宮ノ人ナリ家世々商賣幼ヨリ書ヲ善クシ經義詩文ヲ佐藤一齋野田笛浦藤森弘庵等ニ學ビ後チ丹青ニ志ザシ多ク古人ノ名蹟ヲ蓄ヘ潜心之ヲ學ビ一機軸ヲ出ス嘉永以後國家多故澹如世變ノ不可測ヲ慮リ下野絹川沿岸岡本桑島兩村荒蕪ノ地ヲ闢キ良田二百八十丁ヲ得タリ藩主戸田侯其功ヲ賞シ士籍ニ列ス安政萬延之際國事益難澹如憤慨勤王之志ヲ起シ姉夫大橋訥庵ト謀ル處アリ文久壬戌正月坂下ノ變アリ事澹如訥庵ニ連及シ俱ニ刑獄ニ繋ガレ七月獄ヲ出デ、藩内ニ移サレ病ヲ以テ八月八日歿ス年三十五明治四十一年朝廷特旨ヲ以テ正五位ヲ贈ラル

齊藤拳石先生

齊藤拳石名ハ義字ハ公知南乙粼齊卷石白灣漁長兎山清農等ノ號アリ上總國九十九里海岸白里村字四天木ノ土豪ニシテ累代網主ト稱セラル漁業家ノ長者ナリ性文雅ヲ愛シ富ンデ禮ヲ好ミ又鑒識ニ長シ和漢ノ名蹟收藏太々富ム華山椿山靄厓隆古逸雲等ト交リ年二十一ニシテ家ヲ兄ノ子滄海ニ讓リ自ラ隱居シテ讀書畫筆ニ親ミ後北越江戸ニ遊ビ晚年郷ニ還リ畫室ヲ拱壽庵ト稱シ又小屋ヲ築キ群蛙亭ト名ケ古琴ヲ撫シテ其清音ヲ樂ミ悠々自適明治七年五月三日病歿ス年七十七

○陸放翁待鈔：左の語あり、肥向、小精、座の三
あり。はるむし。今全符を左に録す

○聖旨無酒、并不由、食、戲、作、此、致

○小築、精、座、刻、曲、傍、杉、丸、蟬、腹、無、龜、腸、
酒、幾、不、見、交、無、司、業、高、り、多、来、似、太、常、
雲、確、旋、春、茲、来、滑、凡、炉、坊、侯、葉、坊、
香、由、年、更、入、南、山、去、要、試、毒、表、中、服、玉、
方

○同州聖教序、未以、策、中、：あ、ま、か、今、日、偶、と
珠、琅、閣、一、帖、を、得、り、在、拓、身、記、を、了、る、と、
北、碑、龍、朔、三、年、歲、次、癸、亥、六、月、癸、未、刊、
廿、二、日、己、丑、建、と、あり

大唐諸家良書在田州倅廳

北漢、魏、一、帖、同、州、帖、の、名、あり

○全、浙、兵、潮、ハ、の、末、應、侯、繼、四、の、著、子、不、其、
の、附、録、：日、本、風、土、記、あり、本、の、篇、を、格、別、お、し、
ろ、よ、い、の、こ、ろ、も、其、の、附、録、日、本、の、こ、ろ、に、関、す、
る、と、以、つ、て、取、書、家、騰、字、し、て、花、了、る、の、多、し、
余、新、村、の、南、密、記、を、讀、み、此、を、よ、む、其、の、似、類、
を、引、き、あ、る、と、興、を、感、し、其、出、を、得、ん、と、欲、し、
坊、河、を、過、り、幸、に、一、本、を、得、り、久、持、り、言、
本、を、誤、字、歸、る、多、し、幸、に、真、末、板、高、書、家、
の、訂、正、あり、其、の、朱、字、を、真、末、の、字、入、り、と、並、字、
と、板、名、の、入、り、る、卷、首、板、名、の、花、記、あり、此、を

六名家手澤本とて珠冠すへし
の并庵外集全部百卷十八冊本亦氏誤耕為
の印記あり排印甚比鮮麗也、本の精入る
の文天祥集杜詩一冊近世名醫傳共と近世
刊行する所あり多く坊間に出てももの多し近
世名醫傳と蘭醫傳の傳と掲ぐ尤七珠とす
べし

今も珠冠本、拾へ桐箱表出題二本三一個一本
主七個を得たりと珠と並ぶるし、此素書
弟を得る者難し、物、巻心せしむれば
其價亦高く不慮也、今も得るもの拾め
上品とて價亦廉也、らんらん心を得る

一珠冠初め其本を得たり、故十年日一
它の爲多き者ありといふ録するを例とす、日
徳數十巻七六通高の函を得たり六月
二十九日記

○林子平の此なる傳を墨紙にしるものあり、燦
々然中より、此紙首端に

まろしけんをくさよありしこのあとの
つらき阿やかたこともよ

の大字如龍あり、末尾に頼杏坪のいふ清忠
此の何なるの傳句を載せ、亦此代依流為
同のまの傳文を収む

家尾に肉出のつらなる傳を紙あり是身

正字と作して購ひ入れられ、其後之の
職し能く不危の肉字をとり比較するの模
本を得て動照し、家蔵本の言らるるこ
とを以て、此の墨帳の底本なり、富田本ら
るる本と異なるものいとまあるなり

○ 〇の画を刻し、字は横書き、圓形の
原刊本ハ敢て珍本とあるも、其の圓の形も
為り又好まざる之れを玩ひ日本に於ても有る
菊池埜名と不危の本を底本として覆刻し
たることあり、今も流布あり、卒然之れを
原刊と覺ゆ、其の異るるも、字の偶々
原刊覆刻二本共あり、動照するも、覆刻

古し粗うしてなへ、ること速きを遺し、終に原
刊本を購ひ入れ、閑淡の玩物とらるると
六月二十九日録

○六月廿五日、閑と乗し、終る、回出を授り、此を得
る所左の如し

・ 今才油集 十珍 三冊

家蔵一部と、是れを、之れを、
本を、家蔵本、遠く、及、

・ 前賢の言 十冊

之れ、初稿本、より、版、
流布本、概、一、巻、と、上下、二、冊、と
あり、皆、初稿、あり、此、也、前賢

私刻海三冊添えあり要うきと
うらも敢て海防を妨げず

一 古詩選 十一冊

王世貞撰小所官殿の内比色云
こ稀し

一 宋本奎宸閣碑 一帖

海軍校舎の刷汗に傷み、此碑、
支那に之を極宋極高を極
堂危る今も内府に帰す

一 狭衣 十三冊

海軍本半紙本多しと云ふと大
本も有り難也

一 宗湛日記 一冊

益田春平の宗湛日記、宗湛
自筆の日記を有す、此も益田
の刊し、日記と銘多し、その白
紙本の面目を、
リしを遺紙と云ふと海軍の言
本に比すん、原本に似し

外に琳瑯客、一葉の紙本あり、海軍に在り、
佛原古碑の紙本あり、此世古家の
表紙を極し、その数多あり、古田家
表紙具視、その墓誌あり、
古田家の墓誌あり、
古田家の墓誌あり、

振本の如き撫でんとすも能くせざるものさう家
為に出世大家の養徳振本終り枚あり
之れと併せ花をもんとし挿入の 六月廿五日

○此の山家傳日記を後々あるの取味をこそ
日記の全部をあるの日記にありあり自分
おもしろく感しそのと時代と人●ある茶
道と天正年もの人び、其の茶をすく招えさう
招えさうする人物と豊大、閑と暇あり
あつた豪傑である、勿論利休や本由有楽斎
のたのしみこと大なる人や大波をこの大甲をある時
ら興つてある。豊大閑う手にかゝる茶をす

しと家傳、供する其都府の記を後々
と見ると、豊公うちくしと眼前あるつれ
聲もむやみこえる、秋ふ氣あかす、金鳥
つくめむ、茶合をも怪した記をもえとし
其の茶合の禮七いさき、徳地に松
茶合をやりし後、悠とてあるのちある
と流る、英雄のにお日月あることを思
はしむる、手つらう花を揮し、はう、又つら
が喜ぶと連珠の階句をいなり、徒と諧謔
をも弄し、はうする、まん暮りのありくともやせ
れとある、臭味を感せしる、居えさるの、又豊
公及び、茶合の取合あり、其の茶合うら

元正廿年五月廿九の條下に
一太閤様 瑞合しきり 名号護屋を
元正廿年五月廿九の條下に
一太閤様 瑞合しきり 名号護屋を

外征の折を七豊公の帷幕に矢くし此禮の傑物
に其の曾祖父永享享徳の河媽港に
日本所を建て此禮の人物は日本の外四貿易の梁
祖にあつて其名を永富と云ひ曾祖父の壽
はるい等つてぬえ海航し鑄るを錬術を考
ひ我ら海山を其業に合折の法を教ひ又貨幣
鑄造し大なる貢獻をしたる古ある其の子
孫に宗徳の如きもの出たのを決して偽死
ひらる

二月廿九日

元正廿年五月廿九の條下に
一太閤様 瑞合しきり 名号護屋を

元正廿年

金の御守殿も詔大名家に御茶を奉りて
一庄の六人の七番にそりて宗湛より五番
の内へと被仰出さるる其御人数と被召加
候此時の人数は太田上野殿是は位長候の御舎也也
田原ノ津 秋月宗田宗湛堀尾氏也
持也大田原御前 是は位長候也 十六総士御
六人次第を紙に書けり入口の御茶は有り
是をえり礼するにはいりたり

一金の御茶殿より 平三壘也柱の金を延べ
み殿は名鴨を名田前へ御茶を奉りて六
尺を度五寸をとりて延べがんざんしと
候縁の口は四枚のこし縁をくして骨と腰

の枝は金のしを赤きせんしやうけはうと四壘表
はあやうくひへりしを金福二モエキ中こみ
紙前綿也三尺のちん是は竹つらうと
かき候、田かまうち皮むきの木也上り田産
三つあり是にまうち総十太田原御前
堀尾物此方の衆田産をあり縁に被召候
上野原 宗ギン 宗湛也三人の御茶の
由り始り御茶も也後に御茶の時より縁
の三人も御茶ありはひの也 先御茶より
骨枕よりし小豆足打るすてり後御茶
あり
床より 鑪と花生と うす板とあり

一 甚るる金さう上りる金の基天目の道り
 仕入に賜ひる金四方も其の金の東より入て
 下りる金の風煙釜釜のひりやくま
 川の金の水霞後かろし金の水揚 流稱金
 の甚るる五徳金の井戸茶碗に(若)り仕
 入る 金茶抄 山先と中と二のまをさ
 二 金のへうめん(さみ)と(り)
 一 御茶屋 杉花の御茶屋の扱(こ) 茶道宗無也

天正十五年丁亥六月十九日朝

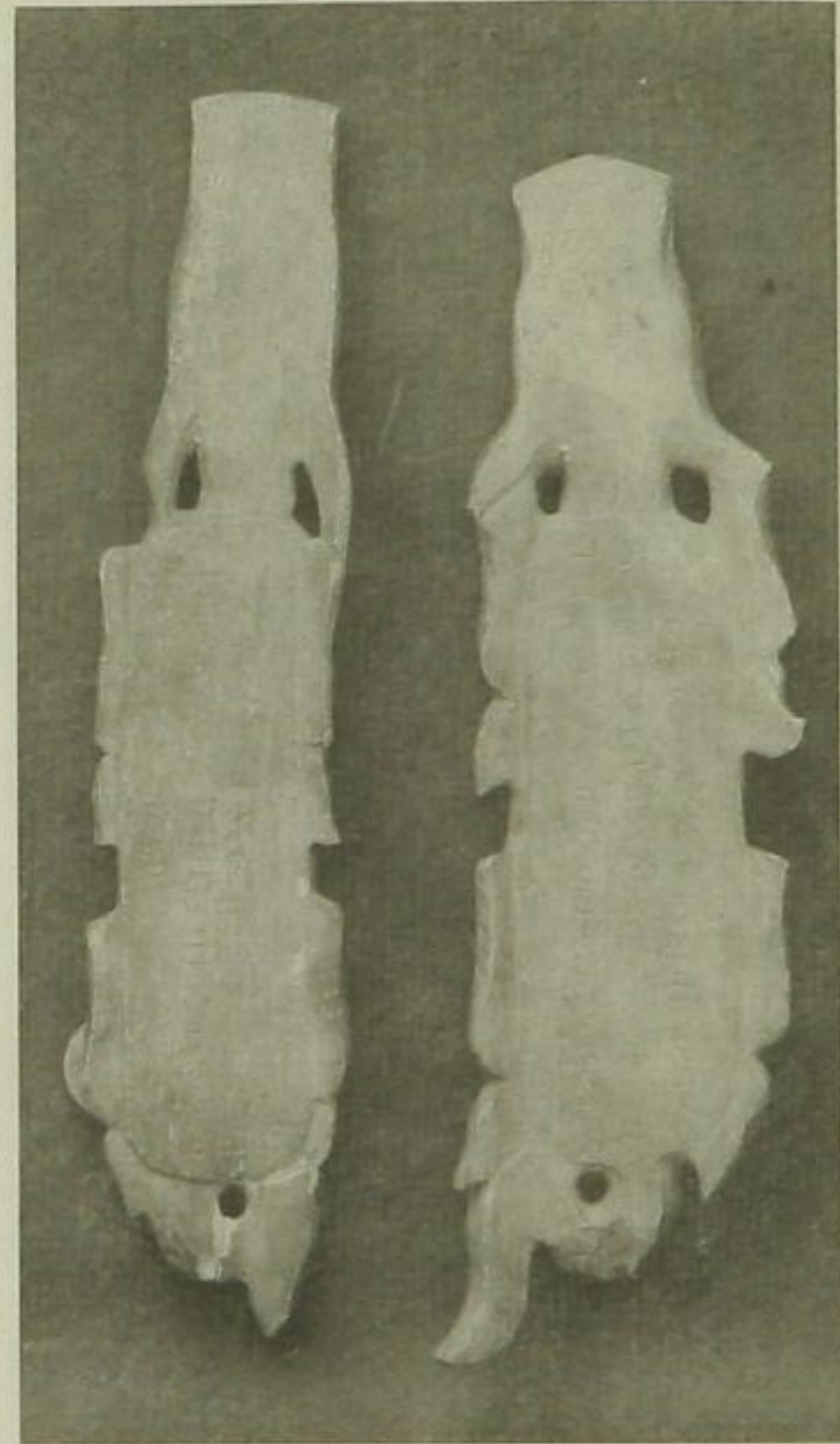
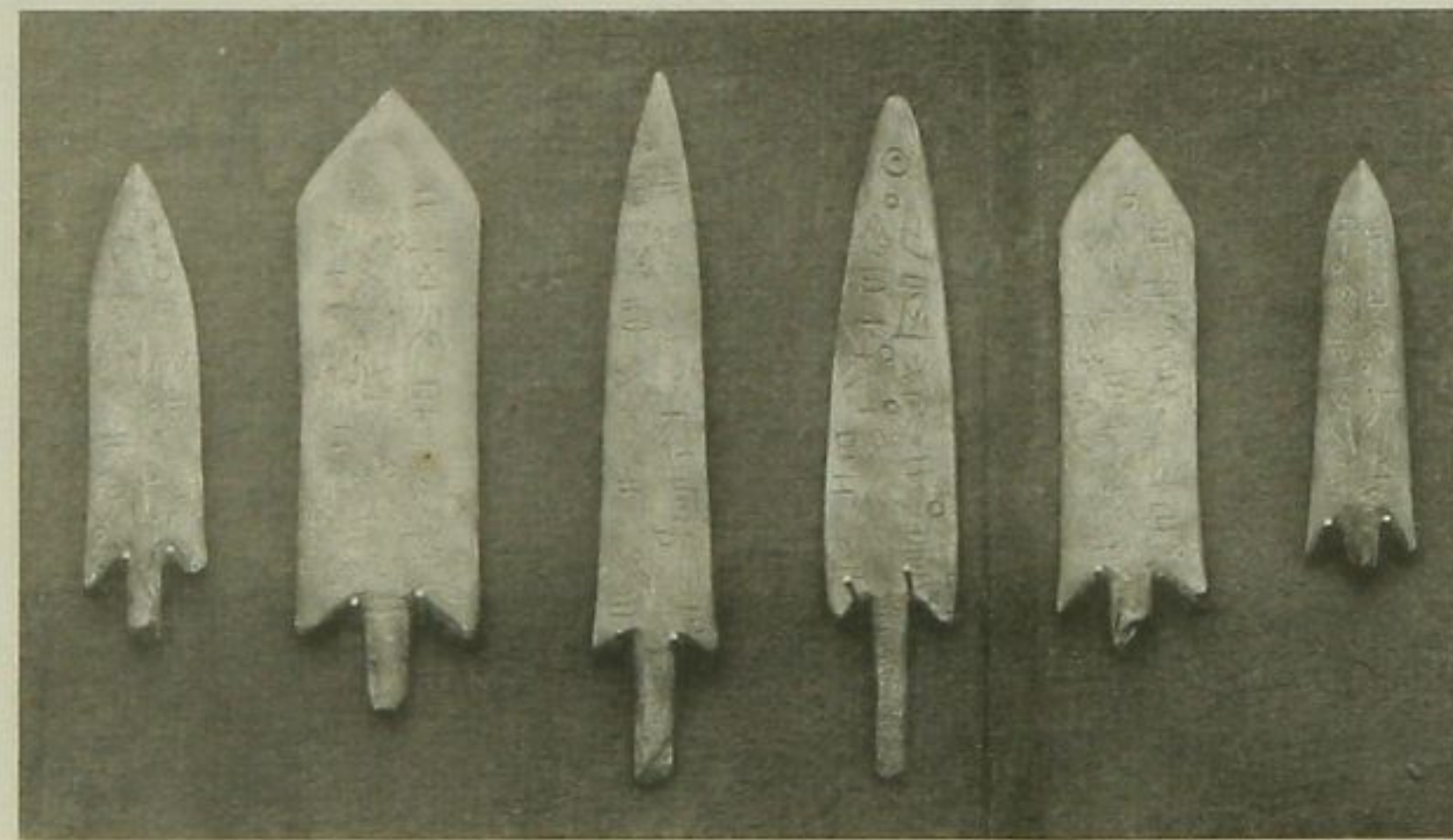
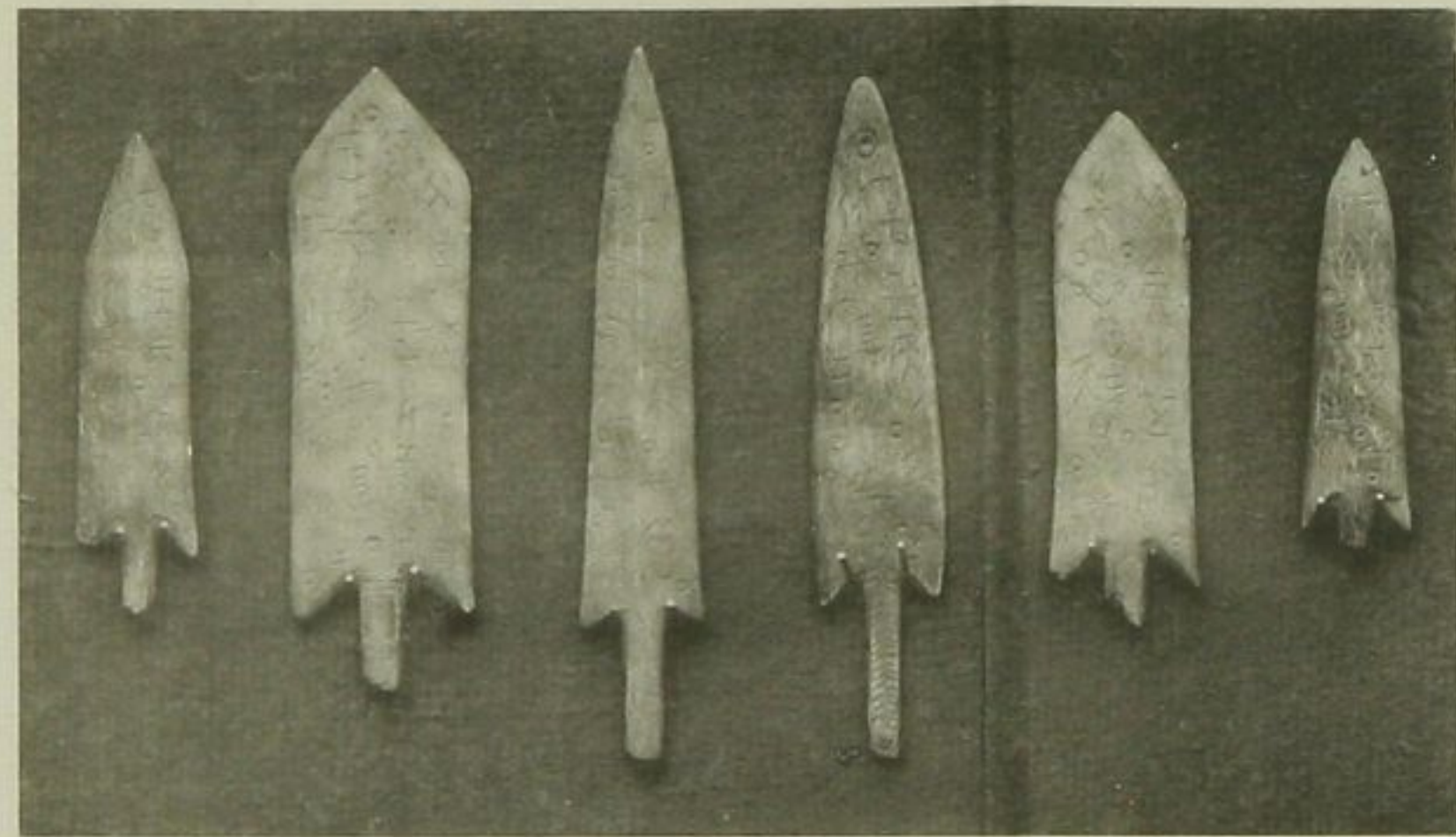
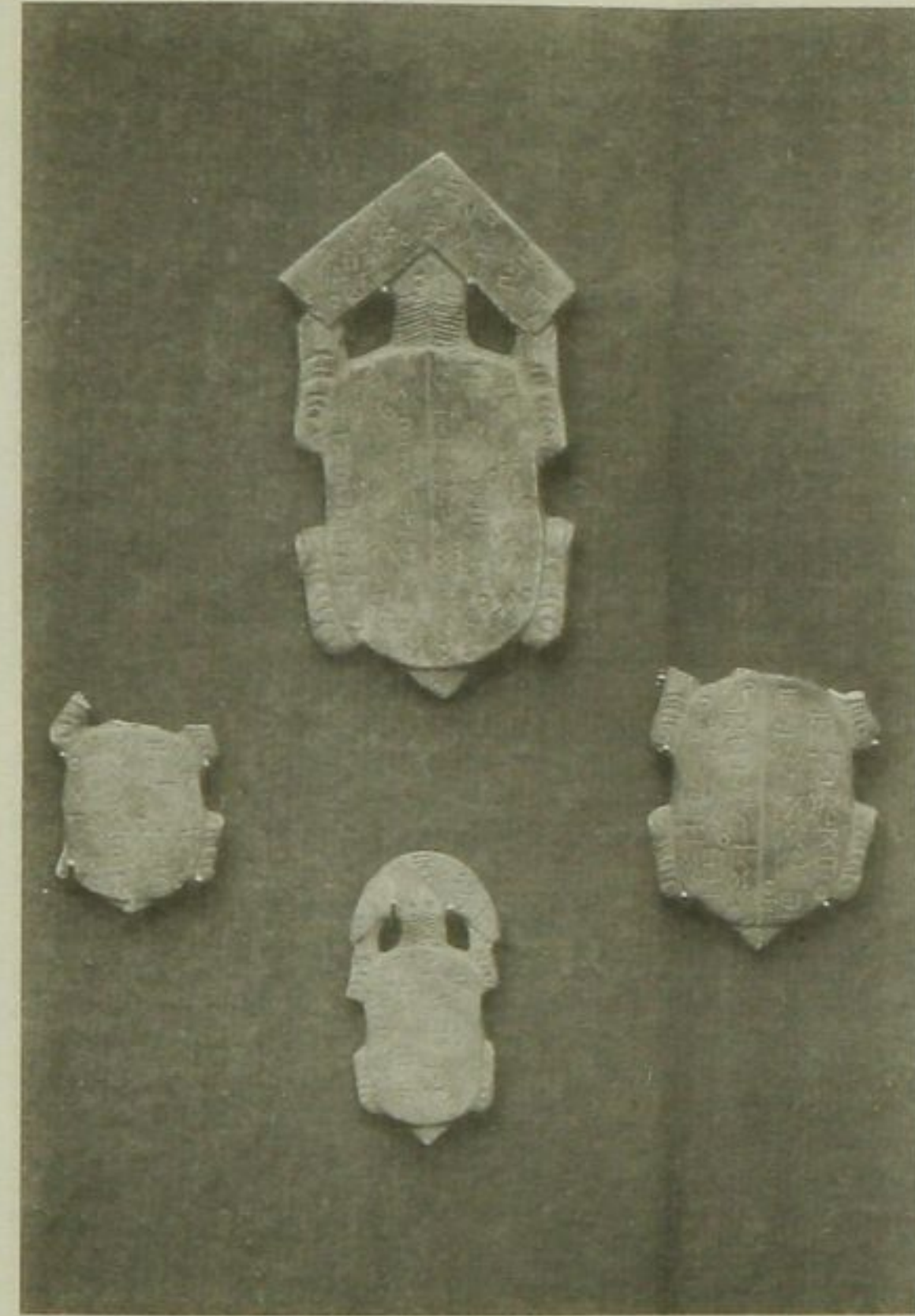
箱崎御陣所より

一 関白扱(こ) 御金さうり 宗湛 宗家百人
 御茶屋の扱(こ) 三疊扱(こ) 上(こ) 二枚障子(こ) 上
 二アケマド六尺ノヲモ扱有、 北路地ノ入ハ外ニ
 クリヲハ入テト(こ) 石アリ箱松ノ下ニ手水鉢
 有木ヲクリタ(ん)也古シテエケムス(こ) 二ヤクハ上
 ニアセテ北ハコ松ノ下マワリテ御茶屋の扱(こ)ノ
 前ニ古竹ニテ腰垣アリソエ(こ) ス戸ノハチキト有
 廻ホノク明方ニハ松ヲ通りハ子戸マテ卷候ハ
 内ヨリ関白扱(こ) ヤウシ御アケナサレテハ
 レヤト御声タカニ御疑も也イマタクテラレテ
 坐敷ノ内ニ不見分サテ上坐ノラレ扱(こ) ハ文字
 懸テソノ前ニ枕虎(こ) 工ノユ草ヲ生テ傷扱(こ) ス

ワル風炉御釜セオホ 手水ノ間ニ水指イモ
ナシラサロテ内ヨリ被成 御出テ茶ヲノマウ
カト御筵候テシキ肩衝ヲ四方盆ニス(井戸
茶碗ニ湯道具入テ水覆方如ノ引切ニテ
御手前也 御茶タテラシテ後ニ此肩ツ
キヲ御手ニモタセラシテお人ノモノヲ御ソ
バニ被官寄 是ヲ見ヨ 此茶有エエニシキト
云ワト御筵候也

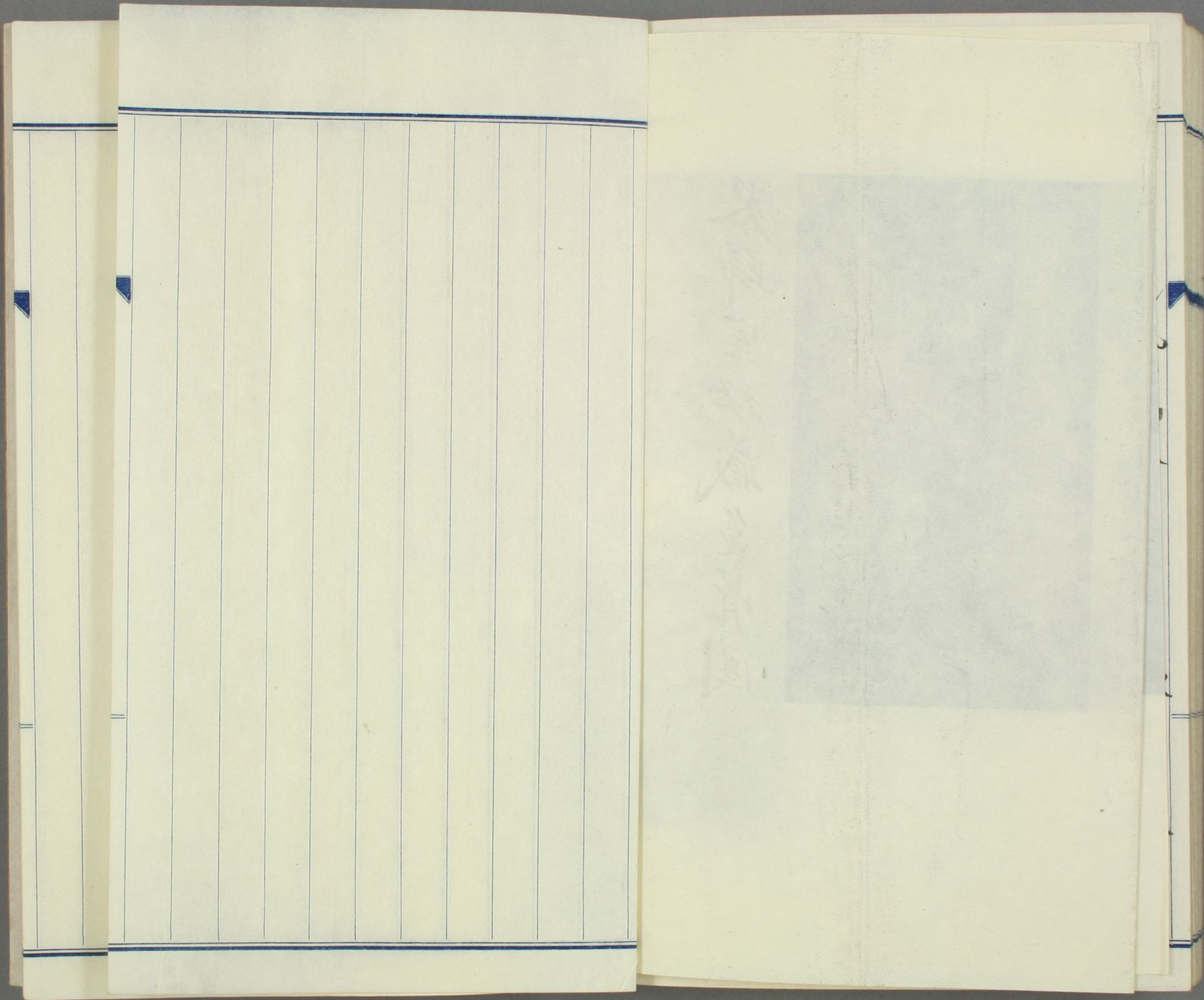
- 一文字ハ 契點トニ字ハナリ有 牧溪也
- 一シキ肩衝ハ 形ニ委書付也

皇公の字の目目なる也 二月廿一日記



琴歸室秘藏龜骨圖





以下全て
白紙

